

平成 29 年度 ユネスコ学生交流事業（玉川大学）実施報告書

英語教育専修 学部 1 回生 下原 舞

1. 日 時

2018 年 2 月 15 日（木）～16 日（金）

2. 場 所

学校法人玉川大学 玉川大学 ELF Study Hall 2015 416 教室

3. 参加者

英語教育専修 1 回生 下原 舞、 守部 北斗、 櫛 乃里花

国語教育専修 1 回生 坂元 亜衣

社会科教育専修 1 回生 仲村 幸奈

英語教育専修 4 回生 谷垣 徹

玉川大学ユネスコクラブ 部員 6 名

4. 概 要

(1) 開催目的

ESD (Education for Sustainable Development) は持続可能な社会づくりの担い手を育てる教育として、日本国内のみならず世界各国で取り組まれている教育プログラムであり、日本ではユネスコスクールが ESD の推進拠点として指定されている。奈良教育大学は、2007 年に日本で最初にユネスコスクールに認定された大学であり、各種プロジェクト等を通じて、ESD の推進に取り組んできた。

ESD を国際的に推進していく取り組みとして、2005 年から 2014 年までの 10 年間を「国連 ESD の 10 年 (DESD)」と定め、ユネスコが主導となって国際的に ESD が展開されてきた。その最終年にあたる 2014 年に、愛知県名古屋市及び岡山市において開催された最終年會合において、DESD の後継プログラムにあたる「持続可能な開発のための教育 (ESD) に関するグローバル・アクション・プログラム (GAP)」が採択された。GAP では 5 つの優先行動分野が示されており、その中で「ユース (ESD への若者の参加の支援)」が挙げられている。そこで、ユネスコスクールにおける活動の主体となる本学学生の育成と、ESD・ユネスコ活動に取り組む他大学学生団体との交流を目的に、本事業を実施する。

(2) 主催・参加団体

【主 催】奈良教育大学

【参加団体】奈良教育大学ユネスコクラブ、玉川大学ユネスコクラブ

(3) 事業内容

本事業の活動内容は、以下の通り。

【1 日目】2 月 15 日（木）

14 : 00	玉川学園前駅集合 会場 (ELF Study Hall 2015) へ移動
14 : 10～14 : 20	自己紹介 ユネスコ学生交流事業の趣旨説明
14 : 20～14 : 45	各団体の活動について (活動紹介発表・質疑応答) ①玉川大学ユネスコクラブ ②奈良教育大学ユネスコクラブ

14:45～16:45	「食」をテーマとした ESD ワークショップ 【第1部】日本文化「節分」の紹介と恵方巻きクレープの実践 【第2部】関東・関西の郷土料理についての調べ学習 【第3部】「食品ロス」をテーマとしたワークショップ
16:45～17:00	1日目のまとめ
18:00～21:00	懇親会・意見交換会

【2日目】2月16日（金）

8:45	町田駅集合 移動
10:00～15:00	東京近郊スタディーツアー ・森美術館「レアンドロ・エルリッヒ展」の見学等 ・活動に関する意見交換
15:00～15:30	2日目のまとめ 解散

5. 各行程の詳細

(1) 各大学の活動紹介

① 玉川大学ユネスコクラブ

玉川大学ユネスコクラブの活動について、2回生1名がパワーポイントを用いて紹介した。玉川大学では特に国際交流に力を入れており、留学生と日本の文化を用いた交流活動を積極的に行っている。毎年、夏の国内スタディーツアーに加えて、春に海外へのスタディーツアーも行っているが、その際必ず現地の世界遺産を訪れることと、現地のユネスコ団体と交流することとしているそうだ。全体を通して、奈良教育大学ユネスコクラブよりも、勉強会などを通して ESD について「学ぶ、深める」機会が多いと感じた。



スタディーツアーでの集合写真

② 奈良教育大学ユネスコクラブ

奈良教育大学ユネスコクラブからは、1回生の坂元、下原、櫛の3名がパワーポイントを用いて紹介した。奈良教育大学では地域に根差した ESD の実践に力を入れており、奈良市で子どもたちを対象に行う ESD 子どもキャンプや東大寺寺子屋等のイベントや、ESD 学生支援活動等を中心に発表した。奈良教育大学ユネスコクラブが大切にしている、「楽しく」ESD を学ぶことの大切さ、教員にとって必要な ESD の学びについて伝えることができた。



活動紹介の様子
(奈良教育大学ユネスコクラブ)

(2) 食とESDについてのワークショップ【奈良教育大学ユネスコクラブ】

各大学による活動紹介に続いて、奈良教育大学ユネスコクラブから1回生の守部、仲村、4回生の谷垣が、「食」をテーマとしたESDワークショップを行った。このワークショップは第1部から第3部の三つから構成されている。

第1部では、開催日である2月にちなんだ日本文化「節分」について、その文化や風習の概要について仲村から説明があり、昔ながらの行事や伝統を知り、守っていく大切さを伝えた。次に学びの実践として、節分の風習の一つである「恵方巻」をクレープにして実際に作り、玉川大学ユネスコクラブにも「楽しく」実践する体験をしてもらった。



実際に作った恵方巻クレープ

第2部では、郷土料理について深く知るために、守部の進行で、地域に根ざした郷土料理の例として、関東の「けんちん汁」、関西の「柿の葉寿司」の二つを取り上げ、①その郷土料理の歴史（由来）、②その地方の気候や風土との関連、③その食材が用いられている理由の三つを中心に調べ学習を行い、班ごとに画用紙にまとめて発表を行った。

第3部では、谷垣の進行で「食品ロス」の問題について学ぶワークショップを行った。「食品廃棄」の問題は近頃報道でもよく取り上げられているが、国内での食品廃棄の約半分は過程から廃棄されていることから、この問題に対して当事者意識を持って考え、それに対して私たちが消費者として出来ることは何かを考えた。

ワークショップ全体を通して、「食」というテーマについて、実践を通して体験的に楽しく学ぶこと、調べ学習を通して地域の気候風土などとの関連について学びを深めること、そして世界が抱える課題と私たちの生活とのつながりを考えるという一連の流れを設定し、参加者の学びに繋がったと考える。

(3) 東京近郊でのスタディーツアー

2日目は六本木にある森美術館へ赴き、「レアンドロ・エルリッヒ展～見ることのリアル～」を見学した。レアンドロ・エルリッヒは現在も国際的に活躍するアルゼンチン出身のアーティストで、彼の作品は大型のインスタレーションから映像まで、視覚的な錯覚や音の効果を用いて、一見見慣れた風景でもよく見ると不思議な仕掛けが存在するというようなアートを体験した。私たちはその錯覚やアートに驚き、感動しただけでなく、「自分たちが普段いかに無意識のうちに習慣や固定観念に捉われて物事を見ているか」ということに気が付いた。本展は、エルリッヒの活動の全容を紹介する、世界でも過去最大規模の個展であるため、今回森美術館でスタディーツアーをしたことは貴重な経験であった。



レアンドロ・エルリッヒ展

6. 参加者の報告書

本事業に参加した学生の報告書を以下に記す。

玉川大学ユネスコクラブとの交流を終えて

英語教育専修 学部1回生 下原 舞

2018年2月15日～16日、玉川大学において平成29年度ユネスコ学生交流事業が行われ、本学ユネスコクラブは玉川大学ユネスコクラブと2日間に渡って交流をした。1日目は各大学の活動紹介をした後に本学学生が『食とESD』に関するワークショップを行い、2日目は森美術館へのスタディーツアーを行った。

今回の学生交流事業で学んだことを、以下の三つの観点から振り返りたい。一つ目は事前勉強の大切さ、二つ目は大学間交流の大切さである。



議論が深まった「食品ロス」についてのKJ法

時間をかけて行ったことで、実際に現地に行って玉川大学ユネスコクラブの皆さんとワークショップをした際に、事前勉強会で得た知識を活かしてより深い議論をすることができたと思う。また、この事前勉強会で学んだ知識や考えは今後の自分たちの活動にも活かすことができると思うので、今後もこのような勉強会を積極的に行っていきたい。

二つ目に、大学間交流の大切さについてであるが、これは1日目の活動紹介やワークショップを通じて感じたことである。今回の玉川大学ユネスコクラブとの交流で、本学ユネスコクラブは地域の子どもの活動等を通して「楽しく」ESDを実践する点が最大の強みであると気付いた。それに対して玉川大学ユネスコクラブは、国際的な活動を数多く行っており、またESDについて学ぶ機会も多く設けているという、自分たちとは違う強みを持っていると感じた。このように、お互いの特徴を知り、交流することで、自分たちの長所や短所に改めて気付いたり、相手との違いを知ったりすることができる。これは相互理解に繋がると同時に、自分たちの活動や考え方の幅を広げるきっかけにもなるのではないかと思うので、今後もこのような大学間交流を続けていきたい。



ワークショップ後の集合写真

以上の2点が、今回の玉川大学ユネスコクラブとの交流を通じて主に学んだことである。この平成29年度学生交流事業では、多様な学びと発見を得ることができ、非常に充実した2日間となった。今後も他大学との交流の機会を大切に、来年度以降も積極的にこれらの活動に関わっていきたい。

玉川大学学生交流を終えて

英語教育専修 学部1回生 守部北斗

2月15日、16日の2日間、奈良教育大学ユネスコクラブは東京都町田市にある玉川大学のユネスコクラブと交流した。1日目はお互いの活動紹介や、私がこの学生交流で特に力を入れたワークショップを行った。2日目は森美術館で催されていた「レアンドロ・エルリッヒ展:見ることのリアル」を訪れた。

この2日間を通して得た学びを次の2点にまとめたい。一つ目はワークショップの進行役を務めたこと、二つ目は事前学習の大切さである。

一つ目のワークショップの進行役についてであるが、「日本の食とESD」に焦点を当てて、恵方巻クレープを実際に作り食べた。さらに、郷土料理を深く知るために「けんちん汁(関東)」、「柿の葉寿司(関西)」の二つのテーマに絞り、画用紙にまとめて発表するという形式でワークショップを行った。このテーマは出発する2日前に開催した「1回生企画」を基にしている。このワークショップで学べるESDの視点は、①食文化の違いを知る【多様性】②その土地の気候や風土と食文化を関連させる【相互性】③2013年にユネスコ無形文化遺産に登録された和食(郷土料理)を継承できるようになる【責任性】の3点である。実践準備で苦心



1日目のワークショップの様子

したことは主に、ワークショップの活動と、どのESDの視点を結びつけるとよいかということと、上に述べた①～③の項目を参加者に体感してもらうにはワークショップをどう組み立てるとよいかということである。しかし、事前に本学学生と綿密に打ち合わせをしたことでよりスムーズにワークショップを進行することができた。私にとって企画を考案し実践する機会は初めてであり、先輩方や同じ1回生のメンバーの大きな支えもあり、企画長やワークショップ班のリーダーとして最後までやり通すことができた。この経験を活かして、今後もユネスコクラブの活動に積極的に参加したい。

二つ目の事前学習の大切さについて。玉川大学学生交流の前に私たちは、ユネスコ、ESD、SDGs、私たちのユネスコ活動とESDという大見出しを設けて、各参加メンバーが担当パートを調べたものを持ち寄って学びを深めた。その中で最も印象に残ったのは「野外活動とESD」である。野外炊飯を例にとると、食材の大切さは【有限性】、準備・調理・片付け一連の流れを子ども中心に行うことは【責任性・連携性】を身につけることができると新たに発見した。当たり前のこととして活動するのではなく、一歩立ち止まりESDの視点を持つことで広い意味でのESD教育が可能となると考えた。

最後に、この2日間で玉川大学のユネスコクラブと初めて交流し、親睦を深められたこと、また奈良教育大学ユネスコクラブ現1回生が今後も積極的に活動していく原動力を創り出したと確信しているので、今後もこのような交流の場を大切にしていきたい。



2日目の集合写真

「知る」「体験する」大切さ

英語教育専修 学部1回生 櫛乃里花

平成30年2月15日～16日の二日間にわたって、私たちは東京の玉川大学ユネスコクラブとの交流を行った。一日目は玉川大学にて交流会・ワークショップを行い、二日目は六本木の街並みを見物したり森美術館にて現代アートに触れたりした。

さてこの玉川大学との交流会を通して得た学びを三つの観点からまとめる。一つ目は「事前学習の重要性」、二つ目は「多角的に考えることの必要性」、三つ目は「文化を体験することの魅力」である。

一つ目の「事前学習の重要性」についてであるが、私たちは今回の交流会に向け当日の1か月以上前から企画長の下原を中心に集まり事前学習を重ねた。内容は、ESD そのものの定義や新学習指導要領について調べたり、自分たちのこれまでの活動をESD的視点から分析したりした。これまでの奈良教育大学ユネスコクラブはESDやそれに関する知識の不足を弱点として指摘されていたが、今回の事前学習を通してその弱点は地道な学習によって克服できるものであることがわかった。奈良教育大学ユネスコクラブは他大学にはない実践力を持っていることから、今回のような学習を継続的に行っていくことで今まで不足していた知識面を補い、さらに活動を発展させることができると期待する。

二つ目の「多角的に考えることの必要性」についてであるが、奈良教育大学ユネスコクラブに在籍する学生のほとんどは学校教員志望であることから、普段は教育的な視点に偏りがちである。しかし今回交流した玉川大学ユネスコクラブの学生は、学部も目指す進路も様々であることからいろいろな分野の視点から意見を提示していた。ESDはもちろん教育を基盤とした概念であるが、それ以外にも様々な要素が相互に関連しあうことで成立する。SDGsはまさにその象徴であり、持続可能な社会を実現させるためには政治や経済といったいくつもの要素が相互に働き合う必要があることを主張している。一つの視点に縛られるのではなく多角的な視点から考えることがこれからの私たちの課題の一つと言えるだろう。

三つ目の「文化を体験することの魅力」についてであるが、今回の交流会を通して私たちは二つの文化を体感した。一つは恵方巻や郷土料理といった日本の伝統的な「食」の文化である。これらは一日目に奈良教育大学ユネスコクラブが行ったワークショップの内容であるが、特に玉川大学ユネスコクラブの学生に柿の葉寿司を実際に食べてもらうことで、古都奈良の食文化を体験してもらうことができた。もう一つは「都市」の文化である。これは二日目のスタディツアーから得たものであるが、私は今まで東京を訪れたことがなかったので、建物の高さや人の多さに驚いた。私は大阪出身であるが現在は奈良に下宿しているため、普段の自分がいかに都市文化に馴染みがないかを改めて感じた。しかし否定的な感覚ではなく、自分の性格には奈良のように歴史観あふれる落ち着いた街並みが合っているのだと再確認することが出来たという感覚である。他を知ることで自らの良さを再認識することが出来たのは、私にとって大きな発見であったと思う。

最後に、この交流会を通して学んだことをまとめると、「知る」「体験する」というこの二つの要素がESDの学びにおいて非常に重要であるといえる。また純粋に玉川大学ユネスコクラブと交流することが出来て非常に嬉しかった。このつながりを大切に、今後も全国サミットなどで協力し活動していきたいと考える。



玉川大学との交流会を通して

国語教育専修 学部1回生 坂元亜衣

2月15日、16日の2日間、私は東京にある玉川大学のユネスコクラブとの交流会を行った。1日目は玉川大学にてお互いのユネスコクラブの活動紹介や事前に準備してきたワークショップを行った。また、2日目には奈良と東京の土地や雰囲気の違いを知るために東京を実際に感じ、森美術館にも訪れた。

これら2日間の学びを大きく二つにわけてまとめていきたい。一つ目は1日目の活動紹介とワークショップでの学びについて、二つ目は2日目の東京観光での学びについてである。

一つ目は1日目の活動紹介とワークショップでの学びである。6人で訪れた今回の玉川大学交流会であったが、事前準備としての活動では活動紹介の担当とワークショップの担当で2つのグループに分かれた。私の担当は活動紹介であり、今回の活動紹介ではパワーポイントを使用するため、事前に自分の担当のスライドを作成し、それに基づいて発表を行った。パワーポイントを作成することでユネスコ



活動紹介の発表をしている様子

クラブの1年間の活動をより知ることができ、また、自分が参加できなかった活動についても詳しく知ることができた。その活動をしっかりと伝えるため周りの状況や様子を見ながらゆっくりと話したつもりではあるが、他の同回生や先輩の発表を見て、まだまだ自分のことでいっぱいになってしまっていて周りに合わせた発表ができていないと感じた。これをこれからの反省とし、改善していきたい。同じ活動紹介を担当してくれていた同回生には大いに助けられ、一人ではできないような素晴らしい発表になったと思う。活動紹介の後に本学1回生の守部が中心となって行ったワークショップでは実際に学んだことを実践するという構造になっており、とても分かりやすく、実践の大切さを改めて感じた。本学ユネスコクラブでは、知識を得るだけでなく、知識を得てからそれを自分たちで実践し楽しく学ぶということに重点が置かれていて、それを表現できたワークショップであったと思う。玉川大学のみなさんも実践ということにすごく関心を持って下さり、本学ユネスコクラブら



ワークショップでの様子

しいワークショップであったのではないかと感じた。また、ワークショップでの主なテーマは日本の伝統行事であったため、日本の伝統行事について考える機会になり、ただ単に周りがやっているからという理由で伝統的な行事を行うのではなく、正しい知識を身につけることが大切であると分かった。一人一人がその行事を行う大切な理由を知っていると行事をないがしろにしたりぞんざいに扱ったりすることも減り、伝統行事は伝統として大事にされ、長く続いていくのではないかと考えた。なぜそれをするのか、それをするにどんな意味があるのか、などを考

えていくことの必要性を感じさせられたワークショップであり、それについて考えていくことが未来に繋がっていくのだと学んだ。

二つ目は、2日目の東京観光での学びである。奈良と違い、東京は多くの人や高い建物に囲まれている。歴史的な建造物や多くの世界遺産がある古都奈良で生活している私にとっては、とても刺激を感じた場所であった。地域の違いは暮らしにも表れるので、その場所にあった行動することが重要であり、自分たちの住んでいるところだけの考えや規模で一概に物事を決めてしまうのではなく、より広くものごとを捉えて柔軟に考えていく力が必要であるのだと感じた。

以上の二つが、私が二日間の玉川大学との交流会を通して得た学びである。今後もこのような大学間交流の機会を大切に、積極的に関わっていきたい。

玉川大学との交流を終えて

社会科教育専修 学部1回生 仲村幸奈

平成29年度ユネスコ学生交流事業が、2月15～16日に東京にある玉川大学で行われた。1日目は、お互いの活動紹介や私たち奈良教育大学ユネスコクラブの「食」に着目したワークショップから、話し合いなどを通して「食品ロスの問題を解決するために、消費者ができること」を全体で考えた。2日目は、スタディーツアーとして森美術館を訪れた。

この2日間の交流を通して学んだことを、私は大きく二つに分けて述べる。一つ目は、事前勉強会の大切さ、二つ目は交流することで知ったお互いの違いについてである。

まず、一つ目は事前勉強会の大切さである。今回私たちは、玉川大学との交流の前に、たくさんの事前勉強会を行った。内容としては、ユネスコやSDGsについて、またESDはもちろんのこと、一部ではあるが今まで活動してきたこととESDの繋がりなどを考えるというものであった。この事前勉強会を行うことで、今まで知らなかった知識が身に付いた。そして、今までの活動と私たちユネスコクラブの活動理念であるESDとの繋がりについて考えることで、活動の振り返りにもなった。また、玉川大学のユネスコクラブのみなさんとのワークショップの際に行う話し合いでも、事前勉強会で培った知識や考え方がより充実した話し合いへと導いたと感じている。事前勉強会で得た知識というのは、今回の交流だけでなく、これからの私たちの活動などにも必要で大切なものなので、とても良い学びの場となった。



ワークショップの様子



活動紹介の様子

二つ目は、交流することで知ったお互いの違いについてである。私は、1日目のお互いの活動紹介において特に違いを感じた。この活動紹介では、片方にあって、片方ないものなどが明確になり非常に興味深かった。私たち奈良教育大学ユネスコクラブは、地域との関わりがとても深い、玉川大学のユネスコクラブは、外国との関わりがとても多く国際的な活動を行っていると感じた。これにより、「地域との関わりはもちろんのこと、外国とも繋がりたい」「国際的な視点をもっと持つべきだ」などという新しい視点や考えを得ることができた。また、玉川大学のみなさんから

私たちの活動紹介を聞いて「参考にします」というような声があがっており、お互いにとって非常に有意義な時間になったのではないかと考えている。そして活動とは別に、奈良と東京という遠い場所との繋がりによって、お互いの地域による文化の違いや言語の違いなどにも触れる良い機会となった。

以上の2点が、この2日間の交流を通して学んだことである。得た学びを私個人だけではなく、全体でも共有することで、私たちの活動がより良くなるよう行動していきたい。また、この交流は、お互いに足りない部分を吸収し合い、さらに成長することができる貴重な場だと考えている。そのため、今後もこういった学生交流事業を積極的に続けていきたいと思う。

4年間のユネスコ学生交流事業を振り返って

英語教育専修 学部4回生 谷垣徹

奈良教育大学では、ESD・ユネスコ活動に関わる他大学・団体の学生との交流の機会として、ユネスコ学生交流事業を2012年度より継続して行っており、今年度で6年目を迎えた。全国でESD・ユネスコ活動に関わる様々な大学・団体との交流を行ってきたが、中でも玉川大学とは6年連続で交流を行ってきた。6年目となる玉川大学でのユネスコ学生交流事業は、2018年2月15日～16日にわたって行われ、1日目は玉川大学において双方の活動交流やワークショップ、2日目は東京近郊でのスタディーツアーを行った。

私は奈良教育大学に入学して以来、このユネスコ学生交流事業に4年間関わってきた。その経験を通して感じたことを、以下の3点で振り返りたい。一つ目は受け継がれる事業の姿について、二つ目は後輩たちの成長について、三つ目は交流を通じた学びの意義についてである。

一つ目に、受け継がれる事業の姿についてである。私は4年間のこの事業に関わり、様々な変化を目の当たりにしてきた。奈良教育大学、玉川大学ともに、中心となって活動を行う学生が変わり、次の世代へと代々受け継がれてきている。関わる学生が変わっても、変わらず大切にしている大学間の繋がりが、また互いに刺激し合い、成長し続けることの素晴らしさを改めて感じた。また毎年開催されている「ユネスコクラブ全国サミット」においても、玉川大学と奈良教育大学が中心となって運営しており、相互連携の深まりの感じるとともに、この事業の意義を感じた。

二つ目に、後輩たちの成長についてである。今回、私以外の参加者は1回生であったため、私はアドバイザーとして関わり、事前の企画段階から基本的に全ての役割を後輩たちに委ねてきた。初めて関わる大きな企画であるにもかかわらず、自分たちの学びの深化や事業の成功に向けて、主体的に参画する後輩の姿をたくさん見ることができた。事業当日においても団体の活動紹介やワークショップの進行においても、全員が大きく活躍していた。「参加」ではなく「参画」する姿に感心した。これから中心となって活躍していく後輩たちに、ますます期待が膨らんだ。



活動紹介をする後輩たちの様子

三つ目に、交流を通じた学びの意義についてである。他大学・団体との交流の意義は、交流する中で他団体の活動のあり方や理念を知り、互いの強みや課題を知ることで、自分たちの活動に還元することができる点であると考えている。奈良教育大学ユネスコクラブではESDを「体験的」に「楽しく」学ぶことを活動の柱としており、実践を通して学ぶことを大切にしている。その反面、ESDやユネスコ活動に関する理論的・知識的な学びが不足していると感じていた。今回の交流に向けて事前勉強会を何度も行い、そういった知識の獲得と自分たちの活動との関連について議論した。その結果、事業当日の活動がより有意義なものになったと感じた。他大学・団体との交流を通じて様々なことを学び、その学びを自分たちの活動に還元し、また次の交流へとつなげる。この一連のサイクルを通して、互いの活動をよりよいものにすることができ、交流を通じた学びの大切さを感じた。

毎年継続して行われているこのユネスコ学生交流事業であるが、関わる学生や事業のあり方が変わっても、学生の貴重な交流の機会として、変わらない事業の良さがある。4年間の経験を経て、新たな試みによってますます実りの多い事業になってきていることも感じる。この交流事業が、学生の貴重な経験の場として、今後も続けていきたいと考えている。